

服装はサーフェスランゲージ、サイレントランゲージとも呼ばれ、言語のようにある種の意味を伝達する。言語においては五十音が組み合わされて単語が構成され、単語が文法というルールによって配列されて文ができ、意味が伝達される。一方、服装では、繊維、糸、布からブラウス、シャツ、スカートなどの被服が構成され、多くの被服のなかから適当なものを選択され着用されて服装になる。この被服から服装への過程にも言語の文法に相当するルールがある。そのルールとは社会規範と呼ばれている社会の文法と着用者個人の文法である。これらの文法を研究するのが被服心理学であり、被服の選択、着用、廃棄などの被服行動を規定するので、被服学にとって非常に重要な部門でありながら日本の被服学では研究、教育することが忘れられている。その忘れられていることにアメリカの大学では、約30年前に気付き、その後積極的に教育、研究を行っている。その成果はアメリカの家政学会誌、修士の学生の研究題目に反映されており、これらの資料を用いて被服学のなかで被服心理学が占める位置を調査した。まず *Home Econ. Res. J.* の第1巻(1972)から最近号までの掲載論文数中、被服学の占める割合が26.9%であり、この被服学に関する論文中、その約50%が被服心理学分野の研究となっている。また、被服学科の修士の学生の研究題目を調査した結果、1976年度は39.8%、1977年度は42.9%が被服心理学に関するものであった。また、アメリカの大学の被服学科で教育されている被服心理学の内容を調査した結果、被服を文化的あるいは社会的な観点から説明するとともに、個人のパーソナリティ、価値観、態度などに関連させて講義されていることがわかった。